

## 和紙の種を蒔く

主宰の和紙き手  
谷野 裕子



岡山県生まれ、兵庫県で育つ。会社員を経て、埼玉県の後継者育成事業の研修生となり、手漉き和紙職人に。学校や博物館等での指導、講演のほか、インドネシア・バリ島で産業振興のため現地の素材を使った紙漉きの技術指導、ホテル・店舗等の内装なども行う。細川紙技術保持者、埼玉県伝統工芸士、彩の国優秀技能者。

### 憧れから飛び込んだ手漉き和紙の世界

楮コなどの天然素材から一枚一枚、手で和紙を漉く仕事をしています。私の工房があるのは、埼玉県ときがわ町の豊かな水にめぐまれた山懐です。町には国宝「慈光寺経」を守り伝える開山1300年の古刹・慈光寺もあり、このあたりは昔から紙づくりが盛んでした。職人を目指したのは30歳ごろで、それまでは東京の専門商社でコンピュータのプログラムを組む仕事をしていました。西日本で生まれ育った私がこの地で和紙と出会ったのは、仕事の都合で埼玉県熊谷市に移住し、休日、ドライブで訪れたことがきっかけです。当時はバブル景気のさなかでしたが、まだたくさん和紙工房がありました。川辺で楮を洗う

様子はまるで昔話に出てくるようなのかな風景で、感激しました。

人の手から生まれる美しい和紙を見て「私もつくりたい！」と思いました。しかし、弟子として受け入れてくれるような場所はなく、和紙の需要が減り、自分の代で終わりと心に決めているような職人がほとんどでした。その後、県を中心に手漉き和紙の後継者育成事業が行われることを知り、私は「採用してくれたら、和紙の産地に移住します」と面接で宣言し、研修生になりました。

### めげずに紙漉きを続けた修業時代

会社を辞め、5年間の研修を受けても一人前になる道が保証されるわけではありません。子どもを育てながら、家計のためアルバイトや内職もしました。親の介護もあり、研修に行くこともままならない時期は焦りも募ります。でも、その中でも最大限できることは何かを考え、和紙に関係する本は何でも読み、和紙でできた工芸品の修復にもチャレンジしました。このような廻り道や試行錯誤が後になって役に立ったと、今になって思います。模索し、時間をかけたことで、逆にめげることなく続けられたのかもしれない。

研修生3年目に細川紙技術者協会から声をかけていただき、技術を学ばせてもらうことになりました。細川紙は埼玉県小川町・東秩父村を中心とした地域で古くからつくられてき

た和紙で、国の重要無形文化財にも指定されています。職人の仕事は、師匠が手取り足取り教えてくれるものではありません。昔から紙漉きの工房は住居の一部にあり、弟子はそこへ通い、なんとか手伝わせてもらう。私は師匠の仕事を見つめ、まずは真似することに集中しようと決め、技術を学びとっていきました。

しかし、修業中は道具ひとつを手に入れるのにも苦労しました。キッチンで楮を煮て、漉き舟（和紙を漉く材料を入れる容器）のかわりに自宅のペランダにベビーバスを置いて名刺大の紙を漉くなど工夫を続け、1999年には、小さいながらも自分の工房を持つことができました。

口数の少ない師匠が亡くなる少し前、「よく頑張ったな」とぼつりと言ってくれたときには、涙が出ました。弟子入りから、もう25年くらい経っていました。

### 子どもたちと一緒に漉く卒業証書

書道や日本画のほか、包装や障子、襖など和紙にはさまざまな用途があります。私は既存の仕事では先輩方になわなないし、新しい使い方、これまで和紙と縁のなかった人にも届くような仕事を考えようと思いました。次の世代に技術を伝えていくため、20年くらい前からはじめた学校での卒業証書の紙づくりもそのひとつです。

毎年、道具と材料を車に積んで、若いス

写真(左): 楮は1年で3m近くまで育つ。冬、落葉後に幹を刈り取る。蒸して外皮をむき、内側の白い部分をさらに煮て叩き、繊維をほぐして漉くと、美しさや耐久性を備えた和紙ができる。写真(右): 旧都幾川村の元給食センターを再利用した工房。大きなシンクは和紙の「漉き船」になっている。奥の棚の上にあるラッパ型のスピーカーは、和紙でつくられている。



タッフと一緒にたくさん学校を訪問しています。畑で楮を育て、皮をむいて煮込んでから塵を取り除き、繊維をほぐすといった材料づくりの工程には、多くの人がびとが関わる膨大な作業があること、和紙を漉くこと自体はほんの一部の工程にすぎないことなどを、まずは授業で説明します。

次に実践です。漉き舟に水、楮、トロアオイという植物の根からつくった「ねり」と呼ばれる粘液を入れ、子どもたちは初めて手にするすげた簀笥という道具で紙を漉きます。自分の卒業証書になる紙をつくることから、なかには緊張して息を止め、溺れそうな顔の子もいます。幸い紙漉きはやり直しがきく。「人生と同じ。やる気さえあれば、何度でもやり直せばいい」とアドバイスしています。

また、ホテルや店舗、茶室やオフィスなど、内装の仕事も素材づくりから行います。和紙は天然素材を混ぜることで新たな風合いが生まれます。佃煮屋さんの店舗内装のためにアサリの殻入りの壁紙をつくったこともありました。間伐材で紙を漉いたり、捨てていた楮の皮から防草シートを試作したり、和紙でウェディングドレスをつくったこともあります。1000年以上保存できるともいわれる和紙の可能性を広げていくことで、この技術を未来につなげたい。今の時代に合わせ、求め

られるものをつくっていくという「売る」ための努力をしなければ、和紙とその技術を残すことはできないと思っています。

### ユネスコ無形文化遺産に登録された細川紙

毎年卒業証書づくりを続けていくには、材料を安定的に入手することも重要ですので、楮の栽培にも取り組んでいます。畑をもっていらっしゃる方にお願ひし、地域の方に協力してもらいながら、今では1000株以上を植える大きな畑もあります。農業からモノづくり、そして商品を売るまでが、私の和紙の仕事です。

2014年、私たちの細川紙は、岐阜県の本美濃紙や島根県の石州半紙とともに「和紙・日本の手漉和紙技術」としてユネスコの無形文化遺産に登録され、町を訪れる人も増えました。われわれにとっては、紙を漉く工程のひとつとつを見直し、素材づくりや環境、コミュニティのあり方をあらためて考える機会になったのではないかと思います。

先人たちは、よい紙をつくるためにどんな思いで伝統をつないできたのだろう、とよく考えます。最初は小さかった工房を大きくし、現在、元給食センターの建物を借りているのも、和紙を学びたい人が集まるラボのような場所がほしいと思ったからです。国内外の多くの方が、ここへ和紙漉きや楮づくりを学びに来ています。

学校の先生がこの工房に来られると、すぐ

にわかります。目を皿のようにして、見たものすべてを子どもたちに伝えたいという思いがにじみ出ているからです。そのような先生とは、教室と工房をオンラインでつなぎ、紙漉きの授業をしたこともありました。

### 技術とともに自然や人との関わりを伝えたい

子どものころは「ドリトル先生」シリーズを読み、獣医に憧れましたが、その夢は叶わず、紆余曲折を経て、和紙の職人となりました。和紙を漉くためには、山や畑といった環境も大切であることをあらためて学び、やはり自然に触れているのが私にとって心地よく、この仕事が好きなのだ、心から思っています。毎年、高知県の四万十町に通っています。

高級和紙の原料となる雁皮がんびが自生しているのも大きな理由ですが、それだけではありません。高知県だけではないと思いますが、海や川で漁をする方々は山の整備にも携わると聞きます。山が豊かでないとも海も豊かにはならないからでしょう。山と海はつながっている。和紙を漉く技術とともに、そういう自然や人びととの関わりを伝えていければと思います。和紙の産地ではない地域もあるでしょうけれど、紙漉きのワークショップに参加したり、漆の食器を使ってみることで、工芸品の魅力を感じることが出来ます。自然との関わりを大切にする日本の伝統工芸のよさを、大人も子どもと一緒に体験してほしいと思います。